

夏期講習だより

第2号

文責 花村 啓太 (箕輪中部小学校)

5月23日(火) 第1回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第1回読み合わせ 令和5年5月23日(火)

読み合わせ範囲: 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部 「善の研究」

第一編 純粹経験 第一章 純粹経験

司会者: 飯田 勇介 先生 (七久保小学校)

レポーター: 井上 雅仁 先生 (宮田中学校)

○レポーター発表 井上 雅仁先生

○純粹経験とは事実そのままに知るの意である。全くの自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といっているものもその実は何らかの思想を交えているのだから、毫も思慮分別を加えない、真に経験そのままの状態をいうのである。

【p80,l.4~1.3】

○ヴントのいったように、すべての判断は複雑なる表象の分析に由りて起こるのである。また判断が徐々に訓練せられ、その統一が厳密となった時には全くの純粹経験の形になるのである、例えば技芸を習う場合に、始めは意識的であった事もこれに熟するに従って無意識となるのである。

【p87,l.2~1.5】

- ・テキストを読み、ぱっと思いついたのは顧問をしている吹奏楽部の子どもたち。コロナ禍により一堂に会し、吹奏楽部の子どもたちはお互いの演奏を聴きあうことができなかった。そんな子どもたちの変化を思いだした。
- ・新体制になり、3年生を中心に自分たちで大会の目標を立てるが、自分たちの演奏が他の団体と比べるとどうか分からない。少しずつうまくなっている自覚はある。中学生の演奏としてどこまでの力があるのかわからない状態だった。
- ・4月に吹奏楽祭があり、小学生から一般の団体がお互いの演奏を聴きあう形で行われた。子どもたちはその中で自分たちが納得のいく演奏ができたが、他の団体の演奏を聴き、それ以上に衝撃を受けていた。翌日のミーティング後の練習で、子どもたちの演奏は音が変わっていた。子どもたちは頭で考えたのではなく、体で感じていた。心で感じていた。これが純粹経験なのではと考えた。
- ・その後の練習で音が合わさり始めた。初めは意識的だったが何回か繰り返すと無意識に変わるのでは。
- ・学級の子どもたちも「2年生になった」という感情、1年生の入場を見た瞬間、「先輩になった」と感じたのではないか。自分たちが動くことが本当はおそらく無意識でできている。
- ・目の前の子どもたちと重ねて考えることが大切だと感じた。

○グループ討議のまとめ

- ・子どもたちは常に純粹経験の連続で、大人達が見るとつい注意してしまったりする。大人は当たり前のことや常識が入っているので、その子を理解するためには、子どもたちの純粹経験を予測して考えて寄り添うことが大切。
- ・子どもたちの純粹経験だけではなく、教師側の子どもの見取り方にも純粹経験があるのではないかと考えることもできるのでは。先入観を持たずにそのままの子どもの姿を見ていくことも大事なのではと感じた。同じ場面でも見取り方が変わったりする。何かあったり、いろいろ失敗してしまったりする子に対して声をかけるとき、自分が先入観を持ってないかどうか大事なのではないかと。
- ・テキストの難解さに、分からない、難しいということも純粹経験なのではないか。こういった場でいろいろ議論しながら、学んでいきたい。
- ・井上先生が体で感じた経験、何気ない経験や「すごい」という言葉しかでない、魂が揺さぶられた経験というのが純粹経験なのではないかと感じた。いい音を出したというのは意識があるが「体で感じたこの音」というのは、井上先生が純粹経験を感じたのではないかと考えた。私たち教師は子どもたちに「こういうことをしなさい」と理屈を押し付けてしまう。子どもたちにとっては純粹経験を妨げていると反省した。
- ・意識的にやっていたことが無意識的になったときに純粹経験なのではないかと考えた。
- ・知識のない状態であったり、無意識で得た経験は子どもたちにしかできないことだと思う。授業の導入場面で問題にどう出会わせるか。子どもたちの純粹経験を大切にしていきたいと思う。

○唐澤正吉先生のまとめ

- ・西田哲学は最後まで純粹経験の考え方を通して言っているので、とても難しい。西洋哲学は判断。判断をもとに組み立てていくが、西田哲学は判断以前にあり、全ての根底にあって主客対立する以前の一緒になった言葉に表せないもの。一番大事なのは、先入観を持たずに、直下（じか）に考えること。あらゆる意志が純粹経験となる。
- ・井上先生が、子どもたちの演奏の音を聞いた瞬間こそが教師としての純粹経験だと思う。純粹経験が働いているのではなく、統一力が働いている。私達はそのことすら気づかないだけだが、井上先生は気づいていた。私たちはそういう感覚や感性を研ぎ澄ましていかないといけない。
- ・純粹経験は全然経験できないことでもない。気づかない。自分を高めていけば、自分の感性を高めていけば、体験できる。私達1人1人がどう生きるか、ということを問いかけている。
- ・私たちが子どもたちを見る目、学校を見る目、世界を見る目が少しでも変わったと気がついたときは純粹経験ではないが、それを感じることができれば、どこかで純粹経験をした証だと思う。
- ・井上先生は今までのやり方と自身が新しく取り入れたやり方に葛藤があったことに気付いている。教師の願いと子どもの願いがぶつかっていると感じている。それは子どもと一緒にあって、部を作ろうという統一力が働いていることと同じ。このことに気づき、自分自身について深めていくことが大事である。
- ・純粹経験を見抜ける力をつけること。そのためにたくさん語り合い、自身の経験を書いて行ったりしていくことが大切である。